

下に没したのである。

かくて星霜一變、識者言を發たば一言にして非常時を云ふ、正に然り、○○の國と謗法の國とが干戈を交ふるに至つては、之をしも非常時と云はずして何ぞや、かゝる超非常時局に、徒らに俗的流行を追ふに究々とし、かけ聲高き現教團の總動員は、軍部への献金として具現し、その結果は、如何なりしか、一部軍部の識者をして眞に宗教家の天職を疑念せしめ、他になすあらんと迄皮肉られた。○○機猷納に際しては、紙上あのブ様な臭聞を専らにする等、如何に、現日蓮教團に、かつての良觀的色彩の濃厚なりや、今し良觀この世にありしならば、鎌倉教線に「痴人良觀」と擧蹙せられし良觀は、江戸の仇を長崎で、かつての日蓮の徒は遂に我が下に來れりと快心の微笑をたゞへる事であらふ。かゝるアンチ教祖性の蔓延はさることながら。

波木井書に於ける良の方の管見

難 波 智 龍

一、緒 言

嘗て淨土門の友松師が彼の家の指方立相の淨土觀を否

波木井書に於ける良の方の管見

曰く僧風教育制度、參議制度、○○○○制度、制度の完備、形式の完璧を期するを以て、その内在的精神を忘る、かくて既成文明と共にその没落を運命するのか、珍香薫し、錦紫衣の「古へ、古へ」の憧憬は、諸君徒らなる復古主義は、正に青年の進歩をばむ反動主義だ。
本化上行日蓮大聖人の身延御入山の御本懐が、かゝる顛倒的なる、否アンチ教祖性の豊なる一見經る末輩の輩出にあつたのか！ 然しながら、われわれは、われわれの世紀は、既に、遙か地平線上仄かなるコスモスを知覺した、かゝる宇宙への飛躍に於て、諸君、正に祖廟は、眞の祖廟中心は、かゝるコスモスへの一つの偉大なるホース・プアーでなくてはならぬ、かくして最後に叫ばれるもの、それは、危機宗學の提唱と云ふ事である。
(學院主催秋季辯論大會に於て)

定したに端を發し、淨土一門に波亂を巻き起した最中、當時發行の「宗教研究」誌上當家の一學者が當家にも指方立相の淨土有りと成して、波木井書等、就中良方の御書を引用して此を論じて居られた事を記憶して居る。

それ以來時日は経過して今日に至るが、昨年春、吾が祖山學院に於て講演例會の課題として松木部長先生より「波木井書に於ける良の方の管見」なる問題の提出を受け、私は偶然御遺文に於ける良方の拜讀をなしたわけであるが、何分短時日の云はゞ、一夜漬程度の研鑽であつて、發表する事を躊躇したものゝ外に研究した人も無かつたので思ひ切つて發表して見たのであつた。(然し不幸にして松木先生が都合上臨席されなかつた關係上御批判を得る事が出来ず、不完全なまゝに正當な批判も與へられ得ず發表は終つて了今日に及んで居る。)

本年度の棲神發行に先立て夏頃から何か投稿をと依頼を受けて居乍ら、旅行、卒業論文、説教、講演、其上十一月中旬には立正大學の雄辯大會へ派遣され、彼れや此れやで善菴日を送り、終に思ひ附いたのが二ヶ年足らずも笈底に投込んで居いた、「良の方の管見」の焼直しである。が出て見ると忘れた處も多く、統一も附かなくなつて居り、不完全極りないものだつたが苦しまぎれに

思ひ切つて投稿した次第である。

勿論未完成のものであり、不完全極りないものであるが、大方先輩の御指導と御批判を待つて將來の再研鑽を約し、茲に前以て御斷りして發表するものである。

二、御遺文上に於ける良の方

宗祖御遺文の中に於て良方が明に示され、之が所謂指方立相的淨土と關係附けて見られ得るのは次の二書である。即ち一は波木井殿御書に於ける。

日蓮ハ日本第一ノ法華經ノ行者也。日蓮ガ弟子檀那等ノ中ニ日蓮ヨリ後ニ來リ給ヒ候ハバ、梵天、帝釋、四大天王、閻魔法王ノ御前ニテモ、日本第一ノ法華行者日蓮房ガ弟子檀那ナリト名乗リテ通り給フベシ、此ノ法華經ハ三途ノ河ニテハ船トナリ死出ノ山ニテハ大白牛車トナリ、冥途ニテハ燈トナリ靈山ニ參ル橋也。靈山ニマシマシテ良ノ廊ニテ尋ネサセ給ヘ必ず待チ奉ルベク候。(一一一四)

であり。茲には明に靈山往詣の思想が見られ、其の「良の廊」も宗祖來迎の一證左と見られないでもない。勿論後に述べるつもりであるが宗祖にも未來觀の信仰の特に熾烈あつた事は否むべくもないが此の靈山が佛眼所證の

世界であり、本化正信の徒の眼前に展開される世界とすべきは所謂當家の成佛義の究極である。従て此の書に於ける往生思想の如きも淨土門の如き所謂指方立相の淨土觀と同一視し終るべきではなく、未來信仰としての往詣觀と娑婆即寂光に於ける靈山觀の調和を此の間に見出し得るものではないかと思ふ。此が即ち當研鑽の中心問題である。

而して次に第二の御書としては上野殿御消息に於ける。御臨終ノキザミ生死ノ中間ニ日蓮必ず迎イニ參リ候ベシ。三世ノ諸佛ノ成道ハ子丑ノ終リ寅ノ刻ノ成道也。佛法ノ住處鬼門ノ方ニ三國共ニ建ツ也。此等ハ相承ノ法門ナルベシ。(一八四三)

である。が此れ亦往詣思想の一端とも見られないではないが此書の上の文に即身成佛義を力説されて、法華超越の所以とされてゐるに見て強ち往詣觀の所明と見るべきではなく、寧ろ此處に宗祖の成佛觀の特徴を拜するものがありはしないかと思ふ。

それは且く置いて前出の波木井書であるが、此の書は古來偽書說濃厚の書であつて、早くから身延歴代の先師が「他筆ナリ」と指摘されて居る如く、其の文章の連絡及び其の内容が餘りにも計畫的に見られ、且つ鹽田教授

も指摘されている(崎報七九號)如く、九月十九日の波木井殿御報に「所らうのあひだはんぎやうをくはへず候事恐れ入り候」(二一〇五)と判形さへお書き遊ばされぬ有様が、後の御臨終間際に此書の長文を認め遊ばる事は想像し難い事である。故に「宗乘講義錄」に依れば誰人か「御遺文匡謬舛案」に其の内容を研究した結果諸御書の連絡編輯なりと斷定し、對照して居るが、夫に依ると前出の波木井書の文は次で出した、上野書の御文並に妙法曼陀羅供養事九二五の拔出編輯なりと見られるのである。若し此の見解誤りなしとせば今の良方の如きに於ても上野書に現れた夫を中心とし兩者を同一の見解に於て研鑽すべきである。私は今斯く斷定して此の問題の研鑽に入る。

三、御書に於ける成佛義の諸相

私は前節に於て宗祖成佛觀に就て一言觸れて置いたが良考と成佛義は極めて密接な關係を有する故更に今宗祖の成佛義に就て概觀して見たい。

此に就ては嘗て、安永辨哲師が崎報に述べていられるが、御書全篇を通じての文相上の分類は大體次の如くである。

成佛

- 1、理ノ即成……一〇、一四、三四（臨終）
- 2、一生成佛……一八（唱即成）五七八（全上）一二一（迹時ノ成佛）三三二（一生入妙）
 四一四（凡身即佛）二〇三（極遲一生成佛）二〇八（全上）
 三、未來作佛……六九、二二〇（外用成佛）五八〇

往生

- 4、出離生死……二一八、二六〇、三三三
- 5、後生善處……三九一、四七六、五一六、六六七
- 6、本時同居ノ往生……五〇
- 7、此土往生……一二、二六五
- 8、十六佛前化生……四七〇、五三
- 9、往生……四八二（持經往生）
- 10、淨土往生……四八八（持經往生）
- 11、西方極樂往生……五九四
- 12、靈山往生……六三三、六八〇

佛作世來

佐後

- 1、即身成佛……（十二文）
- 2、現安后善……（七文）
- 3、臨終正念……（七文）
- 4、靈山往詣……（五三文）
- 5、後生……（三文）
- 6、順次生乃至未來作佛……（八文）
- 7、都率內院……（一文）

現世即成
來世即成
現世成佛
來世成佛

靈山往詣
來世成佛

右の如く、御書文相上に拜しても、其の異同は全く雜多で一見歸趨の迷はしむるものゝ如くに見ゆるが、然し、此等は畢竟、各宗權邪の成佛義を揚棄統一せんとの開會顯正の聖意に基ける結果と見るべきであつて、その眼目が即身成佛速得菩提の妙益に浴せしむるにある事は贅言する迄もないもので、即ち成佛義の根本的立場を信心正因受持正行に置く、受持成佛がその中心である。

而して、受持成佛の具體的相貌は、王佛冥合の至極に基く、所謂本門戒壇の建設、更には四海歸妙の實現であつて、此を逆次に云へば自己の妙法化（即身成佛）が漸次擴充され國家社會の妙法化（靈山淨土）に至り更に四海歸妙（全體淨土）に至る時當家の成佛論は完き相に達するのである。従て、個々の自然讓與受持即成の妙益を云ふも本義は全體的な完成を期する靈山淨土の建設の處に本化應生の大義はあるのである。

乍然、前にも述べた如く、宗祖に於ても現世のみでなく、未來觀の熾烈なるを拜し、之を個人の立場よりせば未來往詣ともなるが、之を社會的人類的に見る時は將來必ず娑婆世界の上に現實態として建設せらるべきもので此の意味に於て娑婆即寂光の立場に於ける靈山觀と、未來信仰としての往詣觀との調和は見出され得るものであ

り、其の究極は娑婆即寂光の建設に求めなければならぬものである。

即ち、其の未來靈山淨土往詣と云ふも、壽量品の實義我此土安穩、常在靈山の娑婆即寂光の教義をより具體化し、宗教化し、神祕化して現世成佛を久遠の未來に延長したに外ならないと見るべきである。

斯く解する時今の問題の良方の如きも指方立相上の一部門と見るべきには非ずして所謂即身成佛義上の一意義を含むものと見るべきである。

四、良の意義

由來良なる語は東洋思想獨特の易に於ける語であつて易經說卦の下に「成言乎良」と説き萬物の太元の一に數へられて居る様であるが、其の性状を靜止の義に置き、八卦の一として二を以て表するのである。

而して此が展開して六十四卦の一となり、「止まりて進まざる象の義」とされる様になつたのであらうが、其の「止まりて進まざる義」と云ふも「靜止の義」と云ふも消極的意味のものでなく、積極的究極の意である事は、易經象傳の下に「兼山良、君子次思不出其位」とあるに依ても知られる。故に此を「限」となし、「堅」とな

し「難」とされ我が國に於ても此の意が傳はり良金神の通俗俗仰に迄及で居るのが、良の語源であらう。

而して、此の良を後世の方位、時間に配して呼ぶに至たのであらう。が、方位では東北に當り、所謂古來鬼門と云はれ、此處に鬼神聚り住ふとされ、蕭古傳（隋書）には「廻風從良地鬼門」と云ふ如く、風の神とも解した様である。

而して時間に之を配しては午前二時より四時迄の間を當てゝいるが、所謂草木も眠る丑滿の頃であつて、古來我が國でも此の時間を神佛の祈願に結び附け「丑滿詣り」の誓とかがあるが、此を見ても東洋風習の上に此の良なる語は強い何物かの暗示を以て傳へて居る様である。

兎に角良なる語は東洋思想の上には相當深い迷信的の傳説を含んで居る事は事實であるが此の事の探究は専門家に非る私の與り知る處でなく、又今の問題に左程深い關係もないから且く別として、宗祖の御書上に之を拜し得るのは、御巧説としての方が、亦は「強ちに成佛の理に違はざれば暫く世間普通の義を用ふべきか」と云ふ御聖意かとも拜し得るが、今は「強ちに成佛の理に違はざれば」の御意と見て成佛の理と良の關係を拜したいと思ふのである。

五、佛教上から見た良

次に佛教上直接な良（東北、丑寅）の關係であるが、此に就ては可成り多くの關係を見る事が出来る。今其の主要なるものを述べ、

一、佛陀の誕生は佛說灌佛經に依れば、太子四月八日夜半明星出時生れ地に墮ちて行く事七步とあり。

二、佛陀の成道―因果經に依れば、七々日思惟の後菩提樹下に於て二月八日（或は十二月八日）早曉明星出る頃の開悟と在る故、此の早曉明星出る時とは何うしても二時より四時迄の間とも見られ丑寅の時である。

三、佛陀の入滅―之を長阿含經並に大般涅槃經に見れば、均尸城外沙羅雙樹下に於て夜半入滅されたと在り、入滅後は城の東門より入り北門に出でて荼毘に付さが附れたとある。故に此の入滅にしても丑寅と何等かの關係けられないでもない様であり、且つ台當兩家が佛陀は靈山に於て八ヶ年法華說法遊ばし入滅は其の良跋提河畔、純陀が家にての入滅とし、宗祖の入滅も此の規に則られたと傳へられる如く、良の方向は佛陀の一生特に御入滅の故事と因縁附けられて現在迄可成り深く、何等かの意義に於て傳へられて居る様である。

四、佛教流傳の豫言―以上は佛陀との直接關係であるが更に今滅後佛法流傳史上の豫言として見らるゝのが佛教東流説である。此に就ては宗祖が屢々大師須梨耶蘇摩の羅什への豫言を引用されて、曾谷入道殿許御書(二二)「此ノ經典東北ニ縁有り予此ノ地文ヲ拜シテ兩眼瀧ノ如シ」

千日尼書(七五)「西天ノ月氏國ハ未申ノ方東方ノ日本國ハ丑寅ノ方也。豈ニ日本國ニ非ズヤ」と日本國と佛法は此の良の方に一關聯を持つものである。

五、傳教大師―此の經東國に縁有りと豫言された法華經が吾が本朝に華を咲かした濫觴は傳教大師であるが、大師が、我が立つそまの叡山はゆくりなくも、都の東北であり、茲に都の守護鬼門の鎮めとして鎮護國家の道場となつたのである。

信仰と人間生活

以上の如く一般佛教の上から概觀するに斯く且く五項目に於て見たが、此等は何れも重要な事項に屬するのである。從て此の先天的の關係が傳教大師に至ては此の先天的因縁と東洋思想に發する鬼門の觀念とが結合されて鎮護國家(都の守護)の道場となつたのであらう。而して宗祖であるが、宗祖に於て上記の諸觀念が取入られたのか或は傳教の思想が直接影響せられたのか、此點俄には斷じ得られないが、恐く直接には傳教の思想が自身安住の方向となつたものであらう事は上に引く曾谷鈔の文並に以下に述べんとする曼荼羅座配の上から見て想像される。又宗祖一代の事蹟に照して上記の諸項が宗祖の上にも幾分影響の有つた事も察知し得る。此等の關係並に意義は以下項を改めて述べる。(以下次號續)

証音寺惠進

私は曾て心靈學の講義を聴いたことがある。心靈學そのものは一種の科學として未だ研究の途上にあるらしい

然し私の如き凡才には、そのやうには思へないで立派な一つの科學のやうな感じがする。